

15 脾炎症性偽腫瘍の1例

佐藤 良平・岡村 直孝・角田 知行
 岩谷 昭・長谷川 潤・島影 尚弘
 田島 健三

長岡赤十字病院外科

症例は43歳、女性。平成19年5月人間ドックのエコーにて脾腫瘍を指摘された。近医を受診し、CTで内部が不均一に造影される5.6cm大の腫瘍として認められた。悪性腫瘍も否定できないため診断・治療目的に手術を勧められたが、経過観察の方針となった。腫瘍は徐々に増大し平成20年8月には腫瘍径8.0cmとなったため、当院を紹介受診した。脾門部へのアプローチが容易な開胸経横隔膜脾摘術を施行した。病理組織学的には炎症性偽腫瘍と診断された。炎症性偽腫瘍は全身の様々な臓器で見られる比較的稀な疾患である。脾原発のものは1984年に初めて報告され、本邦ではこれまでに54例程の報告があり、今回若干の文献的考察を加え報告する。

16 臍頭十二指腸切除術後のプロカルシトニン測定による合併症予測

野村 達也・土屋 嘉昭・梨本 篤
 藪崎 裕・瀧井 康公・中川 悟
 神林智寿子・佐藤 信昭・田中 乙雄
 県立がんセンター外科

【目的】血清プロカルシトニン (PCT) 値は、敗血症診断におけるマーカーとして有用とされている。消化管手術周術期では、術後1病日に高値を示すことが報告されている。臍頭十二指腸切除術において術後1病日のPCT値と術後感染性合併症との関連について検討した。

【方法】臍頭十二指腸が施行された17例を対象とし、術後1病日のPCT値を測定した。

【結果】術後感染性合併症は10例(58%)に発症した。感染症発症例のPCT値は、感染症非発症例に比べて有意に高値を示した($P=0.02$)。術後1病日の白血球数、CRPは両群間に有意差は認めなかった。

【結語】臍頭十二指腸切除術における術後1病

日のPCT測定は、術後感染性合併症発症の早期予測に有用である。

17 DPC病院における外科診療

三科 武・鈴木 聡・二瓶 幸栄
 中野 雅人・小島伸一郎・大橋 拓
 松原 要一・大滝 雅博*・仲谷 健吾**
 鶴岡市立荘内病院外科
 同 小児外科*
 新潟大学臨床研修医**

DPC (diagnosis procedure combination) は急性期入院診療報酬の包括化のために導入されたシステムである。その導入により診療の透明化が期待され、自院の診療が他と比べどのような位置にあるのか比較ができ、医療の質の均質化と無駄のない医療が必要とされる。

当院は平成20年4月よりDPC病院となり、約半年が過ぎ実際の外科診療において何が変わったか検討した。ジェネリック薬剤の使用、外来検査の推進、入院期間の短縮など以前より進んできた。また外来化学療法法の推進も行われている。現在まで収入面では出来高払いと大きな差は見られていないが、より無駄を省いた診療が必要とされる。

18 血管輪による著しい気道狭窄に対する1治療例

長澤 綾子・高橋 昌・橋本 毅久
 白石 修一・上原 彰史・渡辺 弘
 林 純一
 新潟大学大学院医歯学総合研究科
 呼吸循環外科分野

症例は1歳7カ月、男児。在胎31週、1354gの双胎第一子として出生。生後11カ月頃より喘鳴が出現し、加療で改善しないためCTを撮影したところ血管輪による気道狭窄と診断された。

入院時、食道狭窄やその他先天性奇形はなし。術前の3D-CT、気管支鏡検査で気管支～気管に狭窄を認め、最狭部/正常径比=18.4%であった。治療は左側大動脈弓及び動脈管索離断術を行い、